

完了報告書（平成 24 年度）

提出者 日下 渉

提出年月日 2013 年 3 月 12 日

【プロジェクト名】

和文 若者ボランティア活動における親密圏の公共的機能

英文 Public Functions of Intimate Sphere in Youth Volunteer Activities

【メンバー構成】

研究代表者 日下 渉

幹事 山口健一

メンバー 西尾雄志、山口健一、日下 渉

【ねらいと目的】（600 字程度）

本プロジェクトの目的は、若者によるボランティア活動が、彼らの生きづらさを癒す親密な共同性を生み出すと同時に、その共同性が社会変革の基盤として機能する条件を明らかにすることである。

近年、グローバル化の進展とともに既存の社会関係が断片化され、若者の孤独感や生きづらさが深まり、その処方箋として彼らの承認が満たされる共同性や居場所の重要性が高まっていると主張されている。ボランティア活動に参加する若者たちも、他者への貢献のみ関心を抱くのではなく、活動の現場における親密な共同性を重要な動機としている。こうした共同性は、社会運動の基盤として評価される一方で、共同性が自己目的化することで社会運動の公共的役割を損なっているとも批判されている。ここで重要なのは、両者の可能性を視座に収めながら、ボランティア活動の現場で生成される共同性が、閉じられた親密圏に耽溺するのではなく、公共圏において一定の役割を果たす条件を明らかにすることである。

本プロジェクトでは、その条件を明らかにするために、労働力の無償供与によって諸問題の解決を図るワークキャンプ活動に焦点を当てる。ワークキャンプは第一次大戦後に「軍事奉仕」に対抗する「市民奉仕」として出発しており、ボランティアの源流とされるものの、その現代的意義に着目した学術的研究は皆無である。ワークキャンプが生活世界における身体レベルでの交感を通じて共同性を創出していくことに着目し、グローバル化のもとで進展する社会的分断に抗する実践の可能性を模索したい。

【活動の記録】

2012 年 5 月 13 日、研究会（京都大学）、出席者：西尾雄志、山口健一、日下 渉

2012 年 6 月 17 日、研究会（京都大学）、出席者：西尾雄志、山口健一、日下 渉

2012 年 7 月 30 日、研究会（早稲田大学）、出席者：西尾雄志、山口健一、日下 渉

2012 年 9 月 23 日、研究会（京都大学）、出席者：西尾雄志、山口健一、日下 渉

2012 年 12 月 9 日、研究会（京都大学）、出席者：西尾雄志、山口健一、日下 渉

【成果の概要】（800 字程度）

本プロジェクトでは、計 5 回の研究会を開催することで議論を重ね、次の出版原稿を完成することができた。「序」（西尾雄志）、第 1 章「「私」の不安定化と公共性問題」（西尾雄志）、第 2 章「ワークキャンプにおける「根拠地」の思想——安保時代のもうひとつの学生運動」（日下渉）、第 3 章「フィリピン・キャンプにおける「祝祭」の光と影——「私たち／彼ら」の齟齬と繋がり」、第 4 章「「〈つながり〉の現地変革」としてのワークキャンプ——FIWC 唐桑キャンプの経緯と意味世界」、第 5 章「ワークキャンプにみる交響的／公共的な「親密圏」——FIWC 唐桑キャンプを事例に」（山口健一）。

これらの原稿では、1960-70 年代の日本、2000 年代の中国のハンセン病快復村、フィリピンの農村、そして震災と津波による壊滅的な打撃を受けた東北地域で展開されたワークキャンプ運動の社会的機能を検討した。そして、ワークキャンプ活動のなかでは、国家に働きかけたり行政的対応を目指すのではなく、あくまで自らとは異なる経験と背景のなかで生きてきた他者と親密な関係を築くことを重視することによって、新たな共同性に基づく公共的機能が生じていることを主張した。換言すれば、ワークキャンプ運動は、健常者／病者、日本の大学生／フィリピンの貧困層、被災者／非被災者といった乗り越えらぬ壁の存在を前提にしつつ、また矛盾や対立も含みながらも、新しい「我々」を作り出すことによって問題の解決を目指す運動の力を高めていく力をもつ。

近年の研究では、若者の社会運動は自己の承認欲求に基づいており、閉ざされた親密性ないし「居場所」のなかに耽溺するだけであると指摘されてきた。しかし、こうしたワークキャンプ運動の実践には、生きづらさのなかで承認を求める若者と、深刻な問題を抱えた人々が協働して社会を変革していく可能性が宿っていることを主張した。

【通信欄】